



「苦しいときには、『助けてー』  
って言っていんだよ」。

筆者がスクールカウンセラー  
として小、中、高校、特別支援  
学校をまわりながら、幾度とな  
く口にした言葉である。カウ  
ンセラーとして出会う子供の中  
には、つらい経験や感情を誰にも  
話せず、一人で抱え込んでき  
た子も少なくない。その子供たち  
は、筆者とのやりとりを支えに  
しながら、時間をかけて少しずつ  
言葉紡ぎ出していく。

親や教師からは「つらいこと  
があるならば、もっと早く教え

てくれればいいのに」という声  
も聞こえてくる。しかし子供に  
は「言えなかった理由」がある。  
ある子は、親が仕事で疲労困  
憊している姿を見ていた。それ  
ゆえに「自分のことで心配をか  
けて、親の負担を増やしたくな

発信してくれるのだろうか。そ  
れは、大人に「自分が語る言葉  
にしっかりと耳を傾け、それを  
否定しない」という姿を見通し  
たときではないだろうか。  
つまり、子供がSOSを発せ  
られるか否かは、大人の在り様  
に規定されるのである。そして  
言葉を加えるならば、大人の在  
り様は、雇用環境や子育ての社  
会化などの「社会の在り様」に  
大きく左右されている。

## 子供のSOS気付いて

### 大人の在り様、社会に影響

い」という。またある子は、ス  
トレス由来と考えられる体調不  
良がありながらも、努力をすれ  
ば物事は解決できるという教師  
の言葉を信じ、「自分の努力が足  
りないからだ」と言い聞かせて  
いる。さらに別の子は、親や教

分が苦しい状況に置かれていた  
としても、それを伝えることを  
ためらい、期待されているであ  
ろう「元氣な子供」「頑張る子  
供」を演じることがある。  
では、どんなときならば、子  
供は自分の感情を素直に表現、

とだ・たつや 北海道教育  
大学教育学部釧路校講師

(戸田 竜也)